

手の発達のもうひとつの方向

—文明の転換のために—

Another Direction of the Development and Evolution of the Human Hand: For a Reformation of Civilization

平山 満紀

HIRAYAMA, Maki

人間性の鈍磨と人間性の輝き

3.11に際して、多くの人が現代社会に生きる人間の、最も絶望的な姿と、最も希望をもてる姿との両方を見たと感じただろう。

救い難く病んだ人の姿は、原発事故で否応なく公衆に曝された。首都圏の人々の命の危険すら迫る中、東電と政府の事故への対応は信じられないほど鈍かった。さらに東電のトップたちは、多くの人命を危険に陥れ生活を破壊した責任を、全く認識していなかった。原発とは日々の安全管理、自然災害への備えや放射性廃棄物の十万年間にわたる管理など、未来世代へも含めた無限の責任を伴う技術なのだが、経営者達が見せた責任意識はゼロなのだった。安全神話を自他に信じさせてきた欺瞞は、生命を守るためには働くはずの、人間的な思考、行動、感性、つまり人間性を、全面的に鈍磨させることが顕らかになった。人間が作ったはずの巨大技術に人間が支配されると、人間はどんなに身動きが取れなくなって硬直し、屍のように鈍るかが示された。

一方で伝えられた、被災した方達が寒い避難所で身を寄せ合って助け合う姿は、人間的な思考、行動、感性のたくましい力を示し、多くの人に希望を与えた。家族や住まいや仕事を一切失った人達が、できることを見つけ発想力を生かした。自治組織を作っ

て運営した避難所もあった。被災地に災害ユートピアが生まれたような印象すらあって、多数のボランティア達もそれに惹かれて集まったと言える。被災者のそんな姿は、私達が共通に抱いていた最高の人間性を、目に見える形に示したのではないだろうか。

私達が目の当たりにした、人間の最も絶望的な姿と最も希望をもてる姿から、その本質を抽出し、これから目指すべき人間、文明を考える必要があるだろう。

「手当て」—関東大震災に始まった相互治癒の運動

私は3.11後の復興活動を、個人として或いは大学の組織や学生達と共に行う上で、1923年の関東大震災に始まった活動を参考にした。関東大震災は大都市を襲ったので、死者行方不明者は十万人以上と、3.11の数倍に上った。しかも救援は遅滞し、火傷などの外傷のほか、二次災害としての伝染病や感染症、心理的不安などに悩む人が溢れた。

医療の壊滅した現場で、当時十二歳だった野口晴哉（はるちか）（1911～1976）が、具合を悪くした人の身体に本能的に手を当てると治り、それが評判になって門前市をなしたという。野口晴哉の元にはその後も、治療を求めて人々が寄せ来たが、彼は自

分だけが人を癒す方法から転じて、普通の人がお互いに癒しあえる訓練に重点を置くようになった（永沢 2008 : 1 章）。このように創始された野口整体は、愉気（ゆき）法と呼ばれる「手当て」により治癒を促すが、この行為はじつに大きな可能性をもつと言える。

「手当て」は今では治療全般をさす言葉になっているが、人類史上では実際に手を当てることが治療行為の始まりであり、現在でも私達は本能的にそれを行っている。私達は無自覚のうちに頭が痛いとお腹に手をあて、お腹が痛いとお腹にひとりで手を当て、その結果にも気を留めていないが、殆どの場合それで治癒しているのである。また自分以外の他人の悪い部位にもすっと手が引きつけられる能力ももっており、少し練習すると誰もがこの勘を取り戻すことができる。自他未分の自他の間にあるものによって手が身体に引きつけられる。そして、生きものの身体とは、手を当てるとふわあっと流れが生まれて息づき、自己調整の働きが進んでいくのである。自分で自分に手を当てるよりも人に当ててもらったほうが治りが早いことも経験するとわかる（野口 1977 : 2 章）。

人の共生関係の原点を表す「手当て」には、人間性のこれまで充分関心を向けられなかった、それだけに逆に、文明の方向転換に寄与する性質が豊かに存すると私は考える。野口晴哉亡き後、この相互治癒の運動は衰退傾向にあったが、被災地の復興において、また巨大科学技術に依存して破綻しつつある文明の次の文明を築く上で、この可能性を最大限に生かそうと私は考えている。

手の発達のもうひとつの方向

そもそも、ヒト化の過程で、人類の祖先は直立歩

行で自由になった手を盛んに用いるようになった。手の発達では従来研究されてきたように、道具の使用の機能は重要である。小原秀雄が論じるように、道具の使用は自然への主体的働きかけを高度化させる。しかし道具は次第に人間から独立して自動運動し、遂には道具が人間を支配するに至ることもある（小原 2005 : 4, 5, 8, 9 章）。原発という人間の作りだした技術・装置が人間の統御を超えてしまったことは、まさにその典型例である。

しかし手の成達は、道具の使用とは別の方向でも起こった。人類の祖先は道具の使用と併行して、具合の悪い部位に手を当て始めたと推測できる。この「手当て」は従来の人間学ではほとんど着目されてこなかったが、道具の使用とは全く異なる結果を導いてきたことは考慮されるとよい。「手当て」という手の使い方は、道具の使用以上に生命に直接影響を及ぼしながら、道具の使用とは異なり、生きた人間や直接の人間関係から独立し離脱する契機をもたない。「手当て」は修練次第で限りなく洗練できるもので、より微細な不調を感じ取り調整するように高度化できるが、生きた身体同士の関係から一分も離れることはない。そして道具の成達が人間の生命力を衰退させることが多いのとは逆に、「手当て」は人間の生命力を活性化させるのである。

「手当て」の人間学的意味をより理解するために、これと関連のある、野口晴哉のもうひとつ特筆すべき着眼、「活元運動」について解説しよう。これは、くしゃみ、咳、思わず吐く、危険な時に反射的に飛び退くとか目をつぶる、寝返りをうつなど、誰もがしている多様な不随意運動をさすが、野口はこれに身心の自己調整運動としての意味を認識した。まさに人の内なる自然の営みである。「手当て」をするところの「活元運動」が促されて起こることがある。

また身体が鈍って「活元運動」が出にくくなった人が、再び盛んにこれが出せるようになる誘導運動を、野口は開発した（野口 2002：3章）。衰弱した内なる自然を取り戻す方法である。

運動系ともいう錐体路系は、大脳皮質から骨格筋に命令が伝わるが、「活元運動」は経路の異なる錐体外路系の運動で、大脳基底部や中脳、小脳などが関与する。誘導運動をしてポカンとしていると、涙が出たりくしゃみが出たり、身体が寝返りのようにばたばた動いたり、脛がびくびく動くなど、人によってさまざまな運動が自然と起こる。激しくくしゃみを繰り返した末に、子どもの頃鼻に詰めて遊んだ消しゴムの欠片が飛び出す、などということも起こり、自己調整が盛んになる。「活元運動」の間は、脳でコントロールするのは全く別種の、大きなものに動かされている感覚がある。「活元運動」を充分に出すと誰も、身心の不快感が解消し、洗われたような爽快感が得られ、「ただ生きていること」への充足感が非常に深くなる。発汗、毒素・老廃物の排出などが活発になり、反射運動が敏捷になり、総じて生命を損ねることを避け、生命を高めることを敏感に求めるようになる。

思わず悪いところに手を当ててしまう「手当て」は、このような「活元運動」のひとつとも言え、また多様な活元運動をよびさます効果もある。外的自然への働きかけである道具の使用とは全く異なる方向で、人間の生命体としての力を高め、内なる自然を回復する行為である。

文明の転換のために

私は3.11の後、「手当て」を学生や市民が実践できるように、大学や被災地、防災イベント、学校のPTAや教員会などで講習会を行い、また新聞などの

メディアでも伝えてきた。被災地で一時は成立したように見えた災害ユートピアは、被災者が無一物でなくなるにつれ損得勘定も現れ、復興途上で崩れた部分もある。しかし、「手当て」ではいつでも、皆が等しく身一つになり、道具も薬も使わずに無一物で癒しあう、共生関係が出現する。

震災前から学生の教育で、私は「手当て」の実習を行ってきた。現代社会は虚構の中に埋め込まれ、若い世代に人間関係を作る能力が乏しい人が増加しているが、「手当て」は虚構の対極にあるリアルな触れあい、特に若い人が体験することは、虚構からの社会の脱埋め込みのきっかけになるとも考える。

現代資本制社会に目を向けると、社会は欲望の無限の拡大という地球の存続を不可能にする条件を、どう変革していくかの難題を抱えている。欲望の無限の拡大は、生きる不充足感と密に関連していると考えられる。不充足感を満たすために欲望して消費するが充足できないという悪循環が、欲望の無限の拡大の原動力になっている。「ただ生きていること」への充足感を深くすることは、この悪循環からの脱却を可能にすると考える。

人間は道具を発達させ人為的システムで保護的環境を作りあげ、その中で、生命を守るための思考、行動、感性を鈍磨させてきた。冒頭で述べた、東電トップ達の生き物としての鈍りきった姿もその哀れな表れのひとつだ。

「手当て」と「活元運動」は人類史の最初期から人類が、目立たず意識もされない形でめんめんとして行ってきた行為・運動である。これをより生かす文明は、人工的環境のように具体的な「形」が見易いものではなく、非常に多様な形をとりうる。しかしその本質は、大脳皮質の偏った発達を休止させ、生命を守るための思考、行動、感性を再び敏感にさせる、

内なる自然が回復する文明である。被災者に見たのと同じ人間性の輝きを私達はそこに見るだろう。

参考文献

小原秀雄『人類は絶滅を選択するのか』明石書店，2005。

永沢哲『野生の哲学 野口晴哉の生命宇宙』ちくま文庫，2008。

野口晴哉『整体法の基礎』全生社，1977。

野口晴哉『整体入門』ちくま文庫，2002。

平山 満紀（明治大学／社会学，身体論）